

一般演題抄録

- I-1 下気道におけるレチノイン酸誘導遺伝子-I 様受容体を介した抗ウイルス自然免疫応答
○千葉友揮¹ 松宮朋徳² 佐藤次生³ 早狩 亮² 邢 飛²
吉田秀見² 丹治邦和⁴ 水上浩哉³ 今泉忠淳² 伊藤悦朗¹
(弘前大・院医・小児科学¹ 弘前大・院医・脳血管病態学²
弘前大・院医・分子病態病理学³ 弘前大・院医・脳神経病理学⁴)
- I-2 紫外線照射によるチタンおよびチタン合金の骨伝導能効果
○山内良太¹ 板橋泰斗² 和田簡一郎¹ 田中利弘¹
塩崎崇¹ 石橋恭之¹
(弘前大学大学院医学研究科整形外科科学講座¹ 黒石市国民健康保険黒石病院整形外科²)
- II-3 ショッピングモールを活用した地域医療活動報告 第2報 世界糖尿病デー～健康大作戦
○伊藤實喜¹ 水上和博¹ 緒力晴彦²
((医) 健永会明日実病院¹ 慶応義塾大学病院内視鏡センター²)
- II-4 5歳児発達健診における発達障害の疫学
○坂本由唯¹ 齊藤まなぶ¹ 中村和彦^{2,3}
(弘前大・医附属病院・神経科精神科¹、弘前大・院医・神経精神医学²、弘前大・院医・附属子どものこころの発達研究センター³)
- 【背景・目的】近年、発達障害の早期診断、早期介入が推奨されているが、乳幼児を自閉スペクトラム障害 (ASD) と診断するのは容易ではない。そこで、早期診断を可能とするバイオマーカーが求められている。今回、我々は5歳児発達健診を行い、コミュニティーベースな5歳児の発達障害の有病率、合併率などの疫学を明らかにするとともに、早期診断バイオマーカーの有用性およびそれぞれの血中濃度と ASD、注意欠如・多動性障害 (ADHD) の症状との関係性を明らかにし、効果的な診断の方策を開発することを目的に研究を行った。
- 【方法】健診対象児 2571 名に対し、標準化された発達スクリーニング尺度を用いて一次スクリーニングを行い、カットオフ以上の児に対し、注視点、知能、運動検査及び自閉特性、多動・不注意特性に関する保護者の構造化面接、自己記入式検査を行い、小児科医と児童精神科医による診察を経て、DSM-5 基準で発達障害の診断を行った。後日採血を行い、バイオマーカーについて解析した。
- 【結果】一次スクリーニング未返却及び二次健診未受診者を除く 1783 名を母集団とした。この結果、ASD が 3.31%、ADHD が 4.94%、発達性協調運動障害 (DCD) が 4.77%、知的障害/境界知能 (ID/BID) が 3.48%であった。また、ASD では単独障害が 18.6%、ADHD 合併が 55.9%であった。ADHD と DCD は男児に有意に多かった。バイオマーカーの診断別比較では群間比較に有意差はないものの、ASD 群で血清 IGF-1、VLDL-Cho、VLDL-TG 値に有意な性差を認めた。血清 IGF-1、VLDL-Cho、VLDL-TG 値は ASD および ADHD 症状と有意に関連していた。また血漿 Oxytocin 値はコントロール群で有意な性差を認めた。睡眠の問題は診断別比較で ASD、ADHD に有意差があるが、血清 Ferritin 値には診断の有意差はなかった。血清 Ferritin 値と睡眠習慣との関係性は健常児においてのみ朝の症状、ASD において睡眠習慣の問題と負の相関があった。
- 【考察】本研究は 5 歳児における、コミュニティーベースな ASD、ADHD の有病率、合併率を推定するとともに、有病率における性差、バイオマーカーの性差を明らかにし、今後性差に注目して研究を展開する必要性を示した。また 5 歳児での IGF-1、VLDL-Cho、VLDL-TG と ASD、ADHD 症状との関連性を示し、State marker としての可能性、および睡眠の問題における Ferritin 検査の有用性を明らかにした。